

## 令和 2 年漁期 すけとうだら漁獲可能量（T A C）の設定及び配分について（案）

令和 2 年 2 月  
水 産 庁

## 1 T A C

系群	T A C
日本海北部	6,700 トン
オホーツク海南部	55,000 トン
根室海峡	20,000 トン
太平洋	143,000 トン

## ＜設定の考え方＞

（日本海北部）

1. 現在、漁獲の強さは適切な水準にあるが、親魚量は増加傾向には転じたものの、持続的に利用していくために必要な水準を下回っている。
2. 2020 年に親魚となる 2016 年生まれの群れは特に数が多く、これを守り、産卵させることが資源の回復のために重要。一方で、資源回復の実感を得ることも重要。
3. 資源回復と、T A C 数量の増加の双方の確保を目指し、昨年 11 月に公表された親魚量と漁獲量の将来予測を基に 6,700 トンとする。
4. 令和 2 年漁期の T A C 数量決定後、令和 3 年漁期以降の T A C 数量決定の基礎となる管理目標や漁獲シナリオについては、別途議論を開始する。

（オホーツク海南部）

主たる生息水域が外国水域にあり、我が国水域への来遊状況に年変動があることを考慮し、来遊状況が良好な場合に対応できる数量として、近年の最大漁獲量を基に設定する。

（根室海峡）

主たる生息水域が外国水域にあり、我が国水域への来遊状況に年変動があることを考慮し、来遊状況が良好な場合に対応できる数量として、近年の最大漁獲量を基に設定する。

（太平洋）

1. 現在、親魚量・漁獲の強さとも適切な水準にあり、これを維持していくことが重要なことから、昨年 11 月に公表された親魚量と漁獲量の将来予測を基に 143,000 トンとする。  
なお、直近 3 漁期の漁獲量は、99,748 トン（2016 年）、92,917 トン（2017 年）、76,146 トン（2018 年）。
2. 令和 2 年漁期の T A C 数量決定後、令和 3 年漁期以降の T A C 数量決定の基礎となる管理目標や漁獲シナリオについては、別途議論を開始する。

## 2 配分

「漁獲可能量（TAC）の配分シェアの見直しについて」（水産政策審議会第84回資源管理分科会資料5）に従い漁獲実績等に基づき配分する。

参考：すけとうだらTACの推移（直近5漁期）

単位：トン

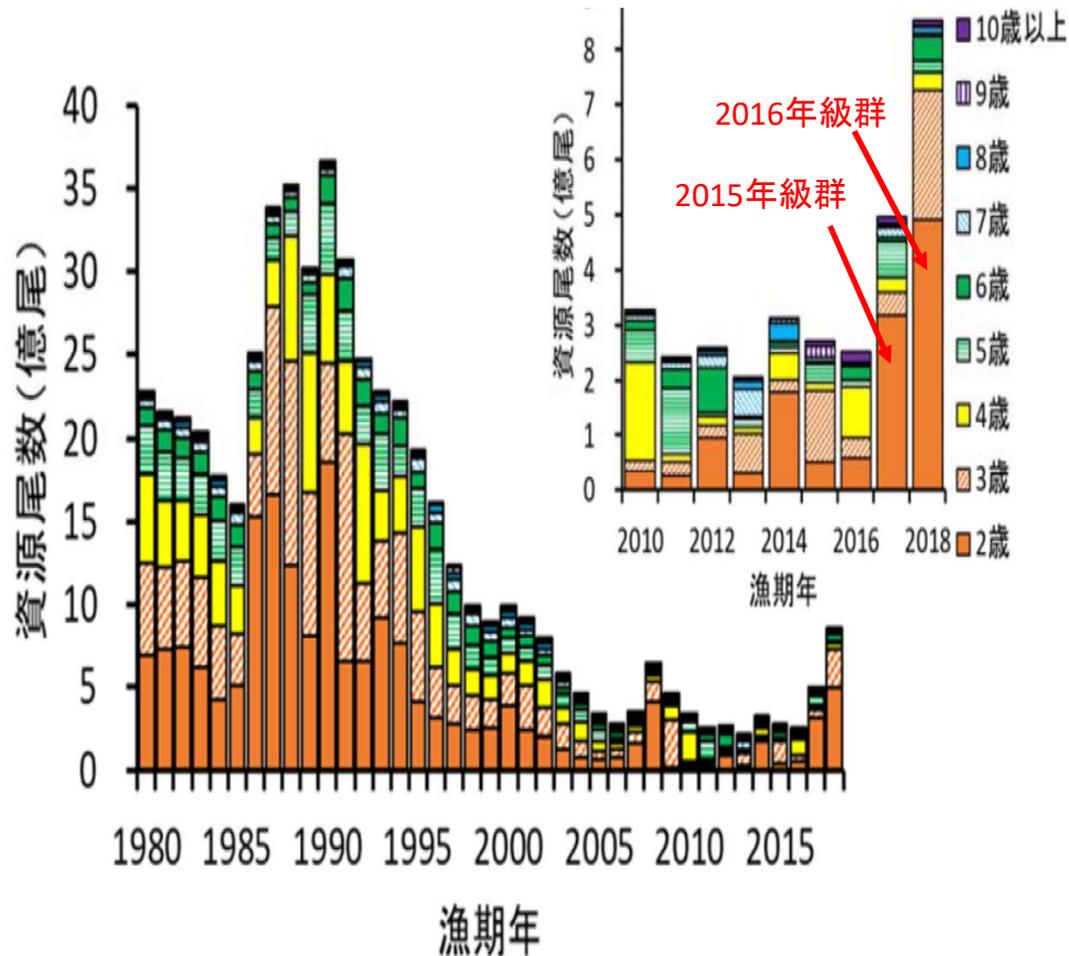
系群	R2年 (案)	H31年 (2019年)	H30年 (2018年)	H29年 (2017年)	H28年 (2016年)
日本海北部	6,700	6,300	6,300	6,300	8,300
オホーツク海南部	55,000	55,000 (53,000)	53,000	53,000	53,000
根室海峡	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
太平洋	143,000	173,000	173,000	184,000	180,000
総漁獲可能量	224,700	254,300 (252,300)	252,300	263,300	261,300

※ 括弧内は改定前の数字（期中改訂があった場合）

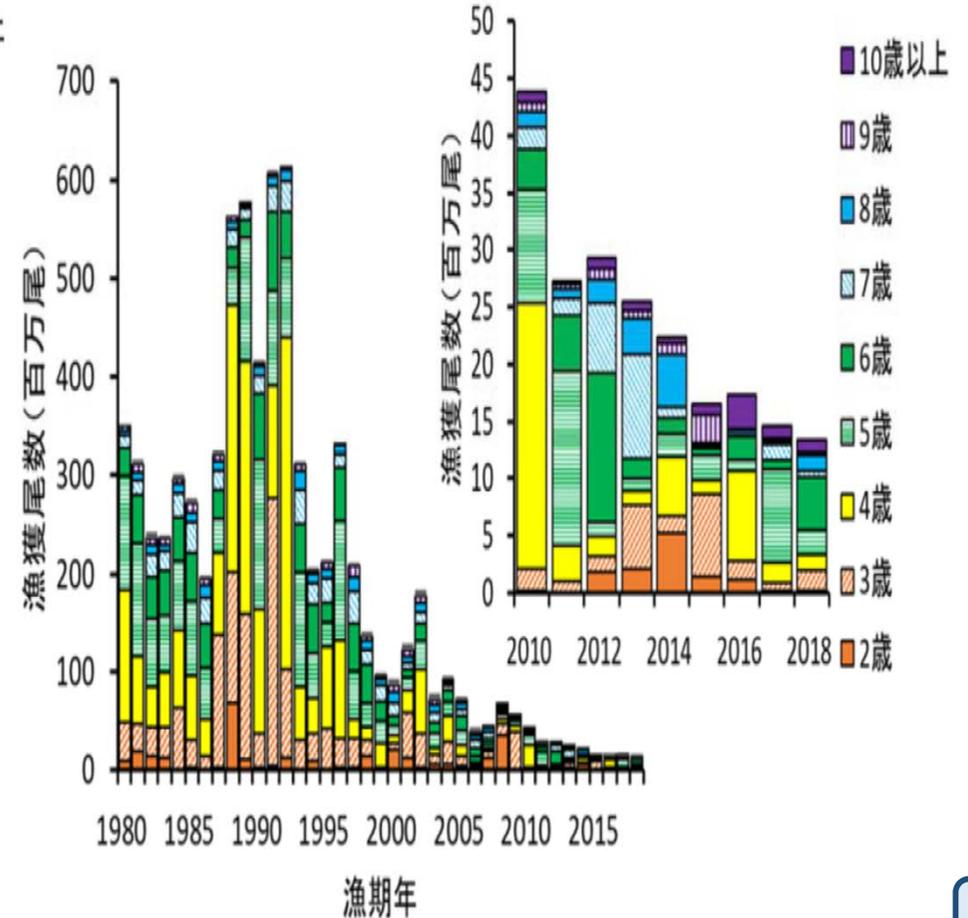
# スケトウダラ日本海北部系群令和2年漁期TAC設定の考え方

- 現在、漁獲の強さは適切な水準にあるが、親魚量は増加傾向には転じたものの、持続的に利用していくために必要な水準を下回っている。
- 2020年に親魚となる2016年生まれの群れは特に数が多く、これを守り、産卵させることが資源の回復のために重要。一方で、資源回復の実感を得ることも重要。

年齢別資源尾数



年齢別漁獲尾数



# スケトウダラ日本海北部令和2年漁期TAC設定の考え方 -続き-

- 資源回復と、TAC数量の増加の双方の確保を目指し、令和2年漁期TACの数量は6,700トンとする。
- また、令和2年漁期のTAC数量決定後、別途令和3年漁期以降のTAC数量決定の基礎となる管理目標や漁獲シナリオについて議論を開始する。

## 将来の親魚量の平均値

2030年に親魚量が171千トンを上回る確率

$\beta$	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	
1	50	63	115	159	148	131	124	136	157	167	169	169	173	40%
0.9	50	63	115	160	150	134	127	139	161	172	175	176	181	46%
0.8	50	63	115	160	152	137	130	143	165	177	182	184	190	51%
0.7	50	63	115	161	155	140	133	147	170	183	189	192	199	57%

単位:千トン

## 将来の漁獲量の平均値

$\beta$	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030
1	5.6	6.3	8.3	14.1	13.8	11.7	10.9	12.3	14.8	16.3	17.0	17.4	18.0
0.9	5.6	6.3	7.5	12.9	12.8	11.0	10.4	11.6	14.0	15.4	16.2	16.7	17.3
0.8	5.6	6.3	6.7	11.6	11.8	10.3	9.7	10.8	13.0	14.4	15.2	15.8	16.5
0.7	5.6	6.3	5.9	10.3	10.6	9.4	9.0	10.0	12.0	13.3	14.1	14.8	15.4

単位:千トン

# スケトウダラ太平洋系群令和2年漁期TAC設定の考え方

- 現在、親魚量・漁獲の強さとも適切な水準にあり、これを維持していくことが重要なことから、令和2年漁期TACの数量は143,000トンとする。なお、直近3漁期の漁獲量は、99,748トン(2016年)、92,917トン(2017年)、76,146トン(2018年)。
- また、令和2年漁期のTAC数量決定後、別途2021年以降のTAC数量決定の基礎となる管理目標や漁獲シナリオについて議論を開始する。

## 将来の親魚量の平均値

2030年に親魚量が220千トンを上回る確率

$\beta$	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	
1	271	284	241	179	148	150	188	208	217	217	215	215	217	41%
0.9	271	284	241	188	160	164	205	228	239	244	245	244	245	59%
0.8	271	284	241	198	174	180	224	250	265	272	275	275	276	77%
0.7	271	284	241	209	190	198	246	277	295	305	309	311	312	90%

単位:千トン

## 将来の漁獲量の平均値

$\beta$	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030
1	76	91	155	129	125	142	161	170	173	172	172	173	174
0.9	76	91	143	123	121	138	157	167	171	173	173	173	174
0.8	76	91	130	116	116	132	151	162	167	170	170	171	171
0.7	76	91	117	108	110	125	144	155	161	164	166	166	167

単位:千トン

# スケトウダラ太平洋系群の将来の漁獲量の推移について

- 昨年11月に公表されたスケトウダラ太平洋系群の将来の漁獲量は、6月に公表されたものと比べて下方修正された。
  - 原因は、
    - ◎2015年及び2018年それぞれの年に生まれた魚の尾数について、
    - ◎最新の値に置き換わった結果、
    - ◎6月の公表結果より少ないことが判明した、
 ことが大きい。
- (なお、6月・11月の公表結果はともに、最大持続生産量(MSY)の実現を目標として計算されたものである。)

将来の漁獲量の平均値(6月公表)

2030年に親魚量が220千トンを上回る確率

$\beta$	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	
1	97	99	193	158	159	166	174	177	177	177	176	177	177	45%
0.9	97	91	178	150	153	163	170	173	174	175	174	175	175	61%
0.8	97	91	162	142	146	158	165	169	171	171	171	172	172	76%
0.7	97	91	145	132	138	151	159	163	165	166	166	167	167	90%

単位:千トン



将来の漁獲量の平均値(11月更新)

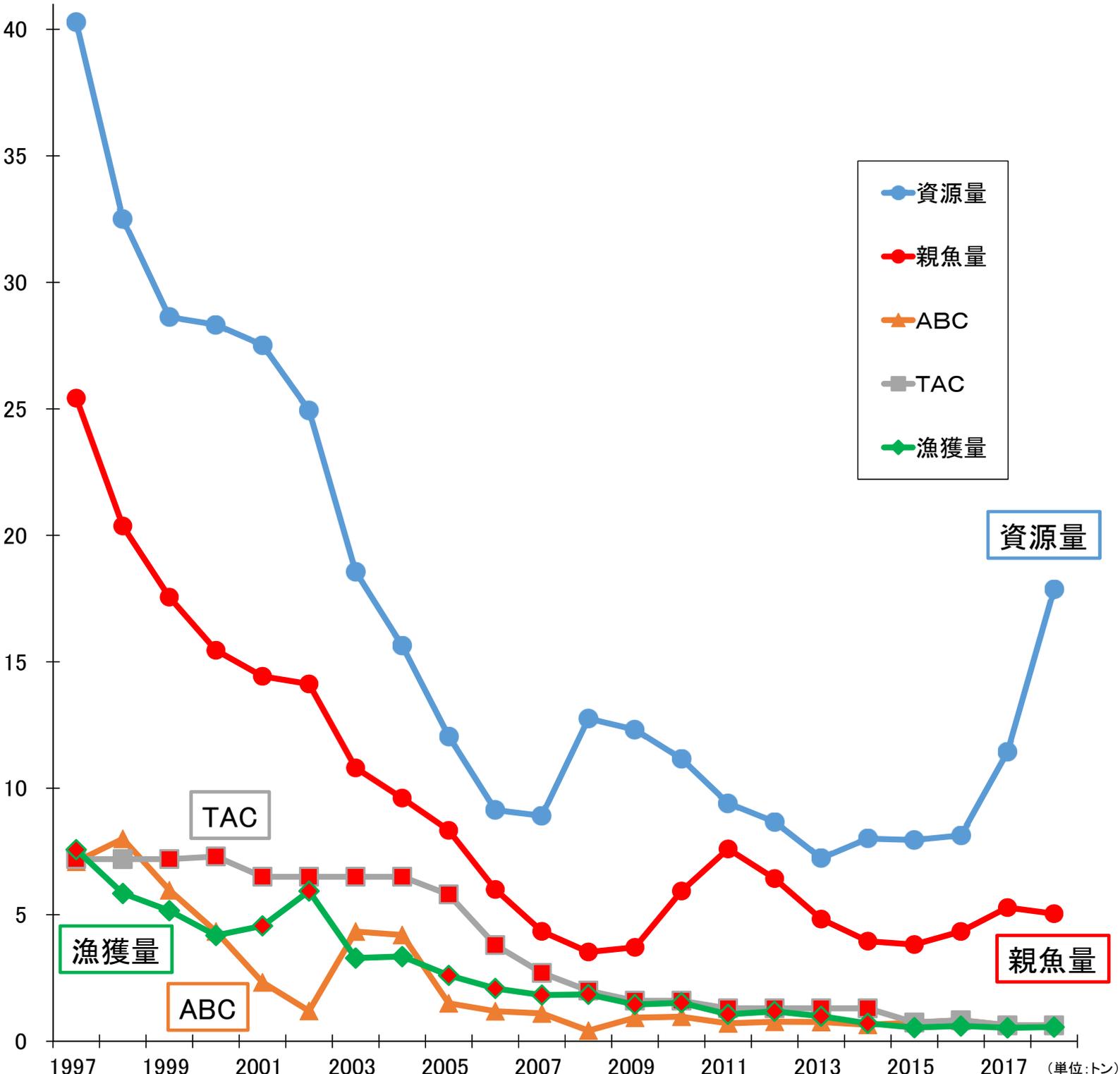
2030年に親魚量が220千トンを上回る確率

$\beta$	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	
1	76	91	155	129	125	142	161	170	173	172	172	173	174	41%
0.9	76	91	143	123	121	138	157	167	171	173	173	173	174	59%
0.8	76	91	130	116	116	132	151	162	167	170	170	171	171	77%
0.7	76	91	117	108	110	125	144	155	161	164	166	166	167	90%

単位:千トン

# スケトウダラ日本海北部系群の動向

(単位:万トン)

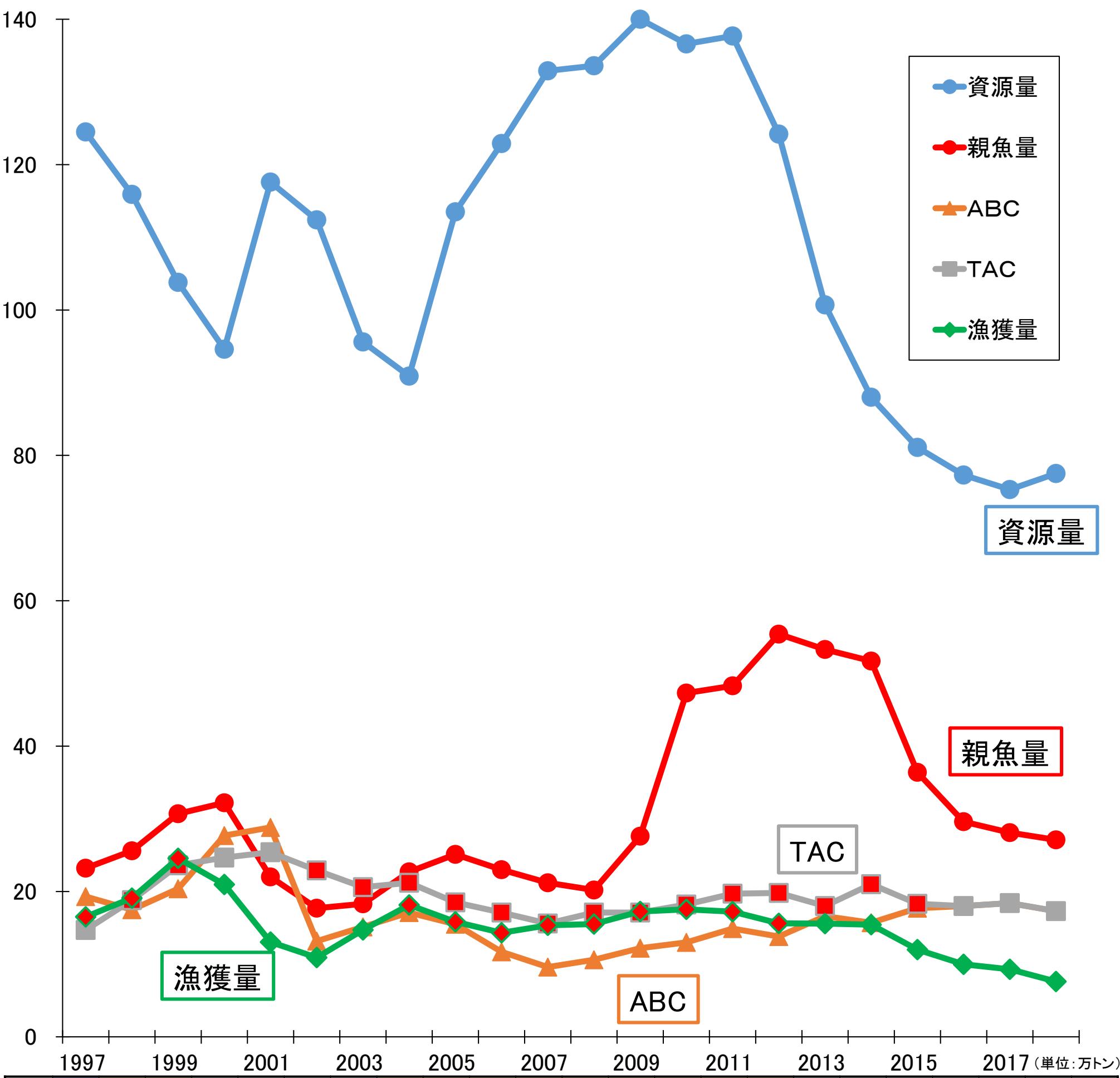


	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
資源量	402,822	325,190	286,245	283,248	275,268	249,398	185,670	156,355	120,596	91,404	89,112	127,540	123,183	111,683	94,089	86,702	72,343	80,107	79,540	81,369	114,348	178,669	
親魚量	254,226	203,695	175,569	154,542	144,252	141,230	108,055	96,109	83,368	60,011	43,438	35,282	37,142	59,373	76,022	64,295	48,293	39,581	38,246	43,385	52,842	50,413	
ABC	71,000	80,000	59,700	43,400	23,300	12,000	43,400	42,000	15,000	11,900	11,000	4,200	9,300	9,700	7,100	7,700	7,600	6,500	7,400	8,300	6,300	6,300	
TAC	72,000	72,000	72,000	73,000	65,000	65,000	65,000	65,000	58,000	38,000	27,000	20,000	16,000	16,000	13,000	13,000	13,000	13,000	7,400	8,300	6,300	6,300	6,300
漁獲量	75,712	58,447	51,627	41,847	45,616	59,359	32,896	33,492	26,022	20,873	18,244	18,516	14,533	15,187	10,637	11,813	9,888	7,085	5,389	6,041	5,315	5,636	
ABC算定方式		$\beta$ (現在の水準)				F40%SPR	Frec=F40%SPR	Fsim	Frec/Fsim	0.9Fsus								Frec30yr	Fcurrent				

別途加算 6,000 7,000 22,000 10,300 ※1997~2000年のTACには表示の他にも左記のとおり、別途加算あり。加算量は太平洋系群と併せて6,000~22,000トン。

# スケトウダラ太平洋系群の動向

(単位: 万トン)



	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
資源量	124.5	115.9	103.8	94.6	117.6	112.4	95.6	90.9	113.5	122.9	132.9	133.6	140.0	136.6	137.7	124.2	100.7	88.0	81.1	77.3	75.3	77.5	
親魚量	23.2	25.6	30.7	32.2	22.0	17.7	18.3	22.7	25.1	23.0	21.2	20.2	27.6	47.3	48.3	55.4	53.3	51.7	36.4	29.6	28.1	27.1	
A B C	19.3	17.5	20.4	27.7	28.8	13.2	15.1	17.1	15.5	11.7	9.6	10.6	12.2	13.0	14.9	13.8	16.6	15.7	17.7	18.0	18.4	17.3	
T A C	14.7	18.8	23.6	24.7	25.4	22.9	20.6	21.2	18.5	17.1	15.6	17.1	17.1	18.2	19.7	19.8	18.0	21.0	18.3	18.0	18.4	17.3	17.3
漁獲量	16.5	19.1	24.6	21.0	13.0	10.9	14.7	18.1	15.8	14.3	15.4	15.5	17.2	17.5	17.2	15.6	15.6	15.4	12.0	10.0	9.3	7.6	
ABC算定方式		$\beta$ (現在の水準)				F30% SPR	Fave3yr	Fsim					Fsim=0.9Fcurrent	F29% SPR	Fcurrent	Fave3yr	1.1 Fcurrent	1.2 Fcurrent	1.4 Fcurrent	Fsus			
別途加算	0.6	0.7	2.2	1.03	※1997~2000年のTACには表示の他にも左記のとおり、別途加算あり。加算量は日本海北部系群と併せて6,000~22,000トン。																		